# 年譜ならびに主要著作

## 生年月日

1951 年 2 月 18 日　京都市に生まれる

## 学歴

1966 年 4 月　京都教育大学附属高等学校入学
1969 年 3 月　京都教育大学附属高等学校卒業
1969 年 4 月　早稲田大学第一文学部フランス文学科入学
1974 年 3 月　早稲田大学第一文学部フランス文学科卒業，文学士

## 職歴

1991 年 4 月　法政大学法学部兼任講師（「国際地域研究・東アジア」担当，2000 年 3 月まで）
1991 年 4 月　静岡大学兼任講師（アジア学集中講義担当，1993 年 7 月まで）
1992 年 4 月　法政大学現代法研究所客員研究員（1997 年 3 月まで）
1992 年 4 月　法政大学大学院社会科学研究科兼任講師（「国際地域論演習」担当，1994 年 3 月まで）
1992 年 4 月　立教大学一般教養部兼任講師（「東アジアの思想と文化」担当，1997 年 3 月まで）
1997 年 4 月　津田塾大学国際関係学部兼任講師（「第三世界の思想と文化」担当，1998 年 3 月まで）
1998 年 4 月　立教大学全学共通カリキュラム兼任講師（「人権とマイノリティ」担当，2000 年 3 月まで）
1999 年 4 月　東京経済大学現代法学部非常勤講師（「近代アジアの歴史と現実」担当，2000 年 3 月まで）
2000 年 4 月　東京経済大学現代法学部専任講師（「人権とマイノリティ」ほか担当，2002 年 3 月まで）
2002 年 4 月　東京経済大学現代法学部助教授（「人権とマイノリティ」ほか担当，2007 年 3 月まで）
2006 年 4 月　東京経済大学国外長期研究員　＊韓国・聖公会大学客員教授（2008 年 3 月まで）

2007年4月　東京経済大学現代法学部准教授（「人権とマイノリティ」ほか担当，2008年3月まで）
2008年4月　東京経済大学現代法学部教授（「人権とマイノリティ」ほか担当）
2008年4月　東京経済大学同全学共通教育センター長（2010年3月まで）
2009年4月　東京経済大学現代法学部教授（2019年3月まで）
2013年9月　千葉大学文学部非常勤講師（「イメージ文化論b」集中講義担当，2014年3月まで）
2018年4月　東京経済大学図書館長（2020年3月まで）
2019年4月　東京経済大学全学共通教育センター教授（2021年3月まで）
2021年3月　東京経済大学退職

## 賞罰

1995年6月　第43回日本エッセイストクラブ賞受賞（著書『子どもの涙』柏書房刊に対して）
2000年5月　第22回マルコポーロ賞受賞（著書『プリーモ・レーヴィへの旅』朝日新聞社刊に対して）
2012年7月　第6回後廣（フグァン）金大中学術賞（韓国・全南大学主催）受賞

## 主要著作

＊日本版の単行書に限る。詳細については，本号所載の著作目録を参照されたい。

1988年 1 月　『長くきびしい道のり：徐兄弟・獄中の生』影書房　※2001年1月　第2版
1989年 3 月　『皇民化政策から指紋押捺まで：在日朝鮮人の「昭和史」』岩波書店〈岩波ブックレット〉
1991年 6 月　『私の西洋美術巡礼』みすず書房
1994年11月　『「民族」を読む：20世紀のアポリア』日本エディタースクール出版部
1995年 3 月　『子どもの涙：ある在日朝鮮人の読書遍歴』柏書房　※2019年4月　復刻版　高文研
1997年 5 月　『分断を生きる：「在日」を超えて』影書房
1999年 7 月　『新しい普遍性へ：徐京植対話集』影書房
1999年 8 月　『プリーモ・レーヴィへの旅』朝日新聞社　※2014年9月　『新版 プリーモ・レーヴィへの旅：アウシュヴィッツは終わるのか？』晃洋書房
2000年 1 月　『断絶の世紀　証言の時代：戦争の記憶をめぐる対話』岩波書店　※高橋哲哉と共著

2000 年 6 月　『石原都知事「三国人」発言の何が問題なのか』影書房　※内海愛子・高橋哲哉と共編著
2001 年 1 月　『過ぎ去らない人々：難民の世紀の墓碑銘』影書房
2001 年 7 月　『青春の死神：記憶のなかの 20 世紀絵画』毎日新聞社
2002 年 3 月　『半難民の位置から：戦後責任論争と在日朝鮮人』影書房
2003 年 9 月　『秤にかけてはならない：日朝問題を考える座標軸』影書房
2005 年 2 月　『教養の再生のために：危機の時代の想像力』影書房　※加藤周一，ノーマ・フィールドと共著
2005 年 7 月　『ディアスポラ紀行：追放された者のまなざし』岩波書店〈岩波新書〉
2007 年 10 月　『夜の時代に語るべきこと：ソウル発「深夜通信」』毎日新聞社
2008 年 4 月　『ソウル－ベルリン玉突き書簡：境界線上の対話』岩波書店　※多和田葉子と共著
2010 年 3 月　『汝の目を信じよ！：統一ドイツ美術紀行』みすず書房
2010 年 4 月　『植民地主義の暴力：「ことばの檻」から〈徐京植評論集〉』高文研
2012 年 1 月　『在日朝鮮人ってどんなひと？〈中学生の質問箱〉』平凡社
2012 年 3 月　『フクシマを歩いて：ディアスポラの眼から』毎日新聞社
2012 年 7 月　『私の西洋音楽巡礼』みすず書房
2014 年 2 月　『フクシマ以後の思想をもとめて：日韓の原発・基地・歴史を歩く』平凡社　※高橋哲哉・韓洪九と共著
2014 年 5 月　『詩の力：「東アジア」近代史の中で〈徐京植評論集Ⅱ〉』高文研
2015 年 8 月　『奪われた野にも春は来るか：鄭周河写真展の記録』高文研　※高橋哲哉と共編著
2015 年 10 月　『越境画廊：私の朝鮮美術巡礼』論創社
2016 年 4 月　『抵抗する知性のための 19 講：私を支えた古典』晃洋書房
2017 年 11 月　『日本リベラル派の頽落〈徐京植評論集Ⅲ〉』高文研
2018 年 9 月　『責任について：日本を問う 20 年の対話』高文研　※高橋哲哉と共著
2020 年 5 月　『メドゥーサの首：私のイタリア人文紀行』論創社
2021 年 2 月　『ウーズ河畔まで：私のイギリス人文紀行』論創社

以上

# （報告）学術フォーラム「東アジア近代史視覚資料の再発見」について

徐京植（ソ・キョンシク）

去る 2019 年 11 月 30 日，本学において標記の学術フォーラムが行なわれた。同フォーラムの実行委員長の任にあたった，当時図書館長の徐京植（現・名誉教授）から以下に，同フォーラムの目的，経緯，成果などについて簡単に報告することとしたい。

## 企画の意図・目的

近年，各大学の研究機関や図書館などにおいて，視覚資料の再発見・再評価，並びにデジタル技術を活用した公開が急速度に進んでおり，これが歴史研究をはじめとして各分野における研究活動の新たな局面を開きつつある。本学図書館には，朝鮮関係を中心として「桜井義之文庫」および「四方博朝鮮文庫」という貴重なコレクションが収蔵されており，これまでも研究活動や図版掲載などによって広く活用され，社会的意義を発信してきた。これら本学が所蔵する貴重資料を「再発見」し，その意義をあらためて評価・発信していくことは，学問研究上の貢献であるばかりでなく，東アジア諸民族間の相互理解と友好増進に資するものと信じ，同企画を実行することとした。

## 「四方博朝鮮文庫」と「桜井義之文庫」

四方博氏（1900～73 年）はもと京城帝国大学教授の経済史学者である。朝鮮経済研究所を設立して，史料収集と整理を行った。主な論文は『朝鮮社会経済史研究』全 3 巻（国書刊行会，1976 年）にまとめられている。戦後は愛知大学の設立に携わり，日朝協会愛知県連合会初代会長，愛知県原水協理事，日本平和委員会全国理事などを歴任した。

四方文庫は長年にわたって氏の自宅で公開されていた「四方朝鮮文庫」をご遺族の好意により 2009 年に本学に寄贈していただいたものである。本学図書館では，同文庫中の非文字資料（絵葉書，地図など）のデジタルアーカイブ化を視野に整理に着手している。

桜井義之文庫は朝鮮関係の書誌研究者である桜井義之氏（1904～89 年）の旧蔵書である。1975 年（第一期）および 1984 年（第二期）に，桜井氏からの寄贈を受けて本学図書館に所蔵されることになった。その特徴は，充実した朝鮮関係の文献，地図，錦絵にある。とくに

錦絵は「世界的」とも称しうる貴重なものである。そのテーマは，「神功皇后・文禄・慶長の役」「征韓論争」「江華島事件」「壬午軍乱」「甲申政変」「金玉均暗殺」「甲午内政改革運動」「朝鮮王城」「日清戦争」の 10 項目である。

桜井氏は 1904 年福島県生まれ，学生時代には吉野作造の秘書となり，大学卒業後の 1928 年，吉野の紹介で京城帝大の助手となった。1933 年から前記の四方博氏のもと朝鮮経済研究所（のち朝鮮経済研究室）で資料収集にあたり，1941 年に朝鮮総督府官房文書課に転出した。この間に書誌作成や資料収集に大きな業績を残した。日本敗戦（朝鮮解放）とともに朝鮮を離れて日本に帰り，東京都立大学図書館の事務長に招かれ，図書館学，書誌学の研究・教育に尽力するとともに，多くの困難の中，文献資料の収集を再開・継続した（以上，橋谷弘「日本の植民地支配と図書館――東京経済大学『桜井義之文庫』に寄せて」『図書館雑誌』86 巻 8 号，1992 年 8 月，村上勝彦「解題」，東京経済大学図書館編・発行『桜井義之文庫目録』1992 年，を参照）。

## 「再発見」

本フォーラムのタイトルに「再発見」という用語を用いた意図は，一つには，日頃は図書館の奥深くに所蔵され，多くの人の目に触れることの少ない貴重資料を，文字どおり「再発見」することであるが，それだけではない。これらの資料を，より多角的に，より多層的に検討して，新しい解釈，新しい議論への道を開くことでもある。そのために，歴史学に限定せず，メディア論や美術史，文学研究などを交えた超領域的な検討を行うこととした。また，韓国，在日コリアンなど異なるポジションからの検討を加える。そうした検討と再発見が，東アジアにおける侵略／被侵略，支配／被支配，それに起因する不和と対立の「近代」を正しく見つめ直していく展望につながることを期待した。

このような意図から，以下の諸氏に研究報告と討論をお願いした。

「近代日本・アジア関係視覚資料の所蔵・公開・研究の現状」橋谷弘（本学名誉教授），「非文字資料を通した近代京城の都市景観記憶の発掘」朴喜用（パク・ヒヨン，ソウル市立大学ソウル学研究所），「錦絵に描かれた『三韓征伐』」李成市（イ・ソンシ，早稲田大学），「日清戦争錦絵にみる身体の表象――視覚メディアとしての錦絵を読む」向後恵里子（明星大学），「民衆の朝鮮認識を探る史料としての錦絵――壬午軍乱時の小林清親作品を中心に」青木然（たばこと塩の博物館）。

また，以下の諸氏（いずれも本学教員）――戸邉秀明（日本近現代史），高津秀之（ヨーロッパ中近世史），田中景（アメリカ近現代史），大岡玲（日本文学）――には，コメンテーターとして多角的な議論を行っていただいた。

## 錦絵

錦絵は日本近世絵画を代表する浮世絵の一ジャンルだが，明治維新を前後して社会が大きく揺れ動き，戊辰戦争，日清戦争，日露戦争など戦争が続く中で，「報道性」のある安価で大衆的なメディアとして広く普及した。錦絵はある意味で扱いの難しい資料と言える。それは見た目も美しく美術史的に大変興味深く，日本の近代における美術文化の発展，ひいては現在のアニメ文化にまで至る脈絡を考察する上で欠かせない資料である。

ところが，本学所蔵の桜井義之文庫の錦絵はほとんどが『戦争画』であり，日本が近代において侵略・支配したアジアの近隣諸民族に対する敵対的かつ蔑視的な表象である。それだけに，錦絵の表象をそのまま受容することには慎重でなければならない。

このような論点は，本学において当初から意識されてきた。参考までに 2004 年 10 月，「桜井文庫」の（第一次）デジタルアーカイブ化を終えて，全文献をウェブ上で公開することになった際の，「ニュースリリース」（広報課）から一部を紹介する。

「明治期の錦絵は江戸のものとは異なり，当時の日本において朝鮮半島について知らせるための，いわば現代のニュース映像・写真のような役割を果たした面を持っています。現実の朝鮮半島の風景や風俗を取材したものとは限らず，その題材は当時の庶民が歓迎したグロテスクなもの，劇的な場面が誇張されたものが多くなっているのが特徴です。したがって，これらの錦絵の内容は明治時代に日本における朝鮮観をうかがう材料とすべきで，これがそのまま当時の出来事，事件の実相を伝えるものでないことに留意していただきたいと存じます。」

ここであえてこの点を再確認しておく次第である。

## 帝国主義と他者表象

世界的に見ても，いわゆる「文明」の発展は他者に対する侵略・支配とともにあり，その過程と深く結びついている。帝国主義国家が他者に「野蛮」「未開」「後進」といった表象を貼り付けることによって自らを「文明」「開明」「先進」の位置に置き，侵略や支配を正当化しようとする際に，美術，写真，映画など視覚メディアが果たした役割は大きい。しかもそれは大衆の無意識にまで浸透し，長期にわたって影響を与え続ける。そのことに対する批判的検討は欠かせない。

「錦絵」に焦点を当てて検討する理由は，近代日本の大衆の心に，視覚イメージとして広く，深く，大衆に浸透し内面化されてきた「他者像」を分析的に検討すること，ひいては，そのような「鏡」に映して「自己像」を「再発見」し，その問題点や克服の方向を探る上で，

独自の重要性があると考えるからである。

以上では主に「錦絵」について述べたが，本学にはそれ以外に絵葉書，古写真，鳥瞰図など，学術的に貴重な資料が収蔵されているが，まだ整理が不十分であり，活用されているとは言い難い状況であった（2019 年現在）。そこで本フォーラムでは，これら視覚資料の活用状況と方向性について橋谷名誉教授から有益な報告していただくとともに，韓国ソウル市立大学の朴喜用教授を招いて「近代京城の都市景観記憶の発掘」という興味深いテーマでご報告いただいた。（橋谷名誉教授のご尽力に改めて感謝します。）

## まとめ

進一層館ホールで行われたフォーラムには学内外からの参加があり，終始真摯な討論が交わされた。また，このフォーラムと関連して，図書館において錦絵の特別展示が行われ，本学教職員・学生も多数これを参観した。（この点について向後恵理子先生のご助力に感謝します。）

なお，2020 年 10 月には，本学創立 120 周年記念事業の一環として，本学図書館より収蔵錦絵全作品を掲載した『桜井義之文庫朝鮮関係錦絵コレクション図録集』が刊行されている。今回のフォーラムは所期の目的をある程度達成できたものと考える。今後ともこれら視覚資料を含めて，本学図書館の収蔵資料がますます活用され，学術研究の発展に資すことを期待したい。（2021 年 10 月 20 日）